佐世保市　俵ケ浦半島

14 一般社団法人チーム俵

人　口	954人
世帯数	371世帯
設　立	平成30年4月

（令和３年１０月１日現在）

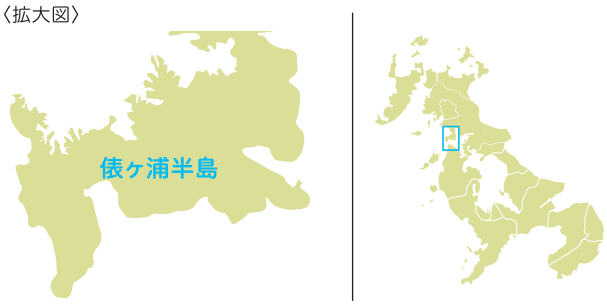
地域の現状と課題

佐世保市の俵ケ浦、野崎、庵浦、下船越の４町で構成する南北約１０㌔の俵ケ浦半島は、西側が西海国立公園「九十九島」、東側が佐世保港に面した風光明媚な景観に加え、明治期に設置された砲台や観測所などの歴史資産も有しています。景観を活かした散策イベントも盛んで、秋に開催される「展海峰コスモスウォーク」などは半島の名物イベントとして定着しています。

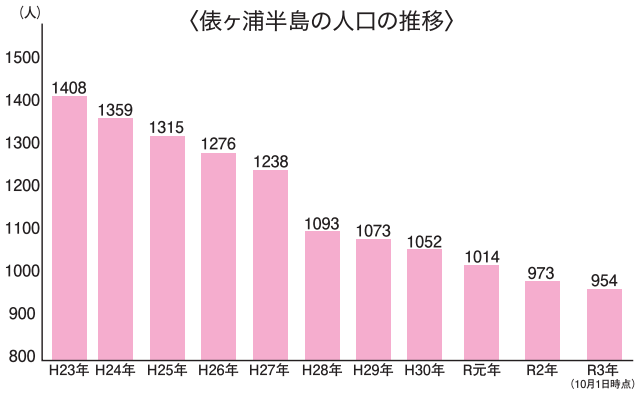
半島では昔から１次産業で生計を立てる「半農半漁」の暮らしが根付いていましたが、近年は高齢化などの影響で担い手不足が顕在化しています。野崎町にあった長崎県障害者支援施設つくも苑が平成２８年３月に半島外に移転したことで人の往来も減少。半島内の小中学校３校は平成２９年３月末までに全て廃校となりました。現在、旧つくも苑跡地は「九十九島観光公園」として生まれ変わり、新たな観光スポットとして期待されています。

半島内の人口全体に占める６５歳以上の高齢者の割合（高齢化率）は平成２７年１０月時点で４１.６％。人口は平成２３年の１４０８人から９５４人（令和３年１１月１日時点）まで減少しました。このままでは４０年後には２００人を切ると推計される中、平成２８年度に住民らで策定した**「俵ケ浦半島未来計画」**では、４０年後の人口規模を５００～１０００人維持と目標に定めました。この計画づくりをきっかけに**住民主体のまちづくり組織「チーム俵」**が発足しました。

〈拡大図〉

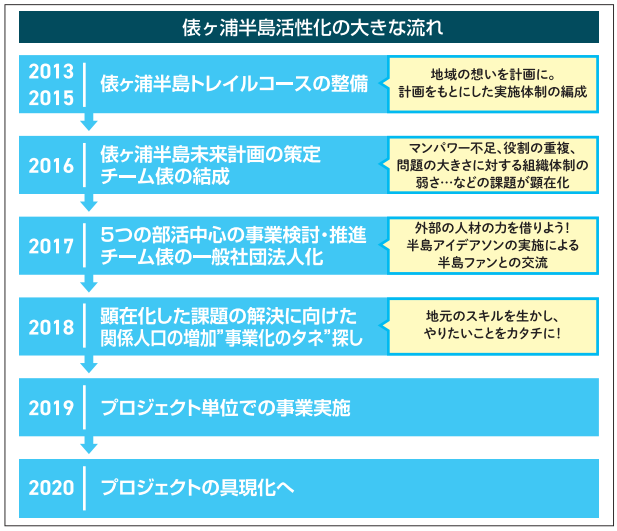


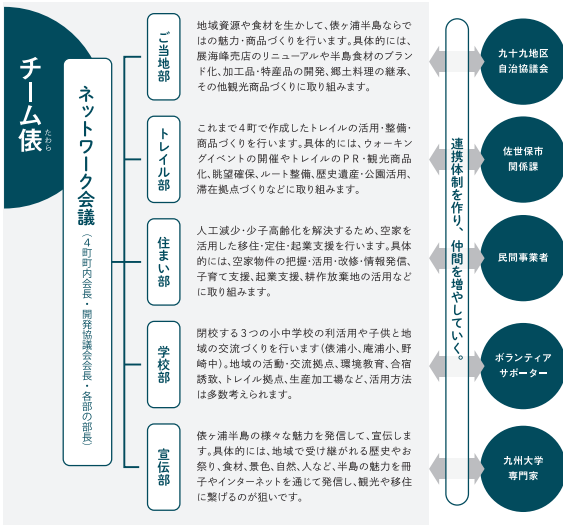
〈俵ヶ浦半島の人口の推移〉



展海峰コスモスウォークの様子＝令和元年10月、佐世保市下船越町

展海峰から臨む佐世保港＝令和3年11月





現在の主な活動内容

〈運営上の課題と克服手法〉

半島の４町でつくる「俵ケ浦半島開発協議会」を母体に発足したチーム俵は「トレイル部」「学校部」「住まい部」「ご当地部」「宣伝部」の五つの「部活」で構成してスタートしました。例えばトレイル部は、４町の住民が整備したトレイルコースの維持などを担当。ご当地部は農産品や加工品を販売する「展海峰ふれあい工房」（下船越町）をリニューアルし、平成３０年４月に「半島キッチン ツッテホッテ」をオープンさせました。

一方で、地域住民だけでは組織運営のノウハウなどが不足していたため、佐世保市職員や集落支援員、地域おこし協力隊、専門家などでつくる**サポートチームを編成**し、組織づくりや商品開発、企画、プロモーション、情報発信などの支援を受けたほか、収益事業の柱となるツッテホッテのオープンを機に組織体制を見直し、任意団体から**一般社団法人へと法人化**しました。活動を続けるうちに継続が困難な事業もあったことから、現在は部活単位ではなく**「ハーブプロジェクト」と「木のものづくりプロジェクト」の二つに絞って活動**しています。

〈特産品開発の取組〉

半島の農業は、赤土の土壌環境を生かしたキャベツやタマネギなどの根菜類が多く栽培されています。ただ、生産者の高齢化に加え、個人で少量生産のため、生産力、販路開拓などが課題となっていました。そこで、住民の野菜作りのノウハウを生かして付加価値の高い植物を栽培し、**新たな収入源**をつくろうと、地域の食ビジネスの先進地を視察した上で、平成３１年１月から半島の生産者を交えた意見交換会を複数回開きました。

意見交換会では、ハーブの栽培というアイデアが挙がり、特に在来種で希少な品種の和ハッカに関心が集まりました。そこで、**女性を中心**に十数人が**「俵ケ浦半島ハーブプロジェクト」**に

和ハッカの苗を植え付ける様子＝令和元年8月、佐世保市俵ケ浦町

飲食店に和ハッカをPRするメンバーら＝令和2年6月、佐世保市内

参加し、福岡県でハーブティーを提供するカフェの経営者から指導を受けながら栽培に着手しました。栽培や乾燥加工のスキルを学びながら試行錯誤を続け、平成３１年１１月に収穫した和ハッカの８割は、大阪のレストランに購入してもらい、料理やデザートとして提供されました。和ハッカのドライハーブとアロマスプレーは令和２年度から出荷しており、ネットショップなどで販売しています。ハーブプロジェクトは地元のレストランやホテルから問い合わせがあるなど反響があっており、現在、活動費の数％程度をプロジェクトの収益で賄っています。まだ採算ベースには至っていないものの、今後の重要な収益源に位置付けています。

和ハッカのドライハーブとアロマスプレー

POINT

- 一般社団法人へと法人化
- 二つのプロジェクトに注力
- 新たな収入源の確保

INTERVIEW

できることから着実に

ツッテホッテの運営は、佐世保港に寄港するクルーズ船のインバウンド客を取り込むことで、売り上げはリニューアル前の２倍になるなど順調でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて観光客が激減。令和２年５月からは休業を余儀なくされました。当初は道の駅のようなコンセプトで地元産品を販売していましたが、ターゲット層をインバウンド客に変えたことで、住民や地元生産者の足が遠のく要因にもなりました。

チーム俵　理事
山口　昭正さん

現在は、コロナ禍でイベントが開催できない中、ツッテホッテを週末限定でコーヒーショップに貸しているほか、**県道や市道の草刈り、ハーブプロジェクトの収益の一部で、維持費を賄う**ようにしています。まだ、ハーブプロジェクトは採算ベースではありませんが、**地域おこしは継続性が大切**です。これからも自分たちのペースで、**できることから着実**に前に進みたいと考えています。

行政からの支援

俵ケ浦半島でのトレイルコースづくりを始めとした住民主体の取り組みを踏まえ、佐世保市は地方創生戦略のリーディングプロジェクトの一つに半島の活性化を掲げました。平成２９年～令和元年の３年間、**組織づくりや外部人材を活用したＷＥＢ広報戦略などに長崎県小さな楽園づくり交付金、地方創生推進交付金などを活用しながら財政支援**を行いました。

「部活」ごとに事業アイデアを話し合う参加者＝佐世保市、庵浦町公民館

今後の課題・展望

これまで佐世保市や集落支援員、地域おこし協力隊などのサポートを受けてきました。しかし、令和２年度で補助金が終了し、単独でプロジェクトを運営する体制に切り替えようとしましたが、事務局専従の人材は確保できず、４町の**公民館長とチーム俵の各部長などが月に１回集まる「ネットワーク会議」が事務局機能**を担っているのが実情です。

また、活性化プロジェクトを通して「半島を知る」「半島に来る」ところまでは実を結びましたが、「半島に滞在する」「半島に住む」ところまではつながっていないのが現状です。

今後は九十九島観光公園との連携を視野に、遊漁船や釣り体験、ハーブや伐採木を使った商品販売、滞在型のコンテンツづくりを進めながら、**アフターコロナを見据え、地域の人たちの力を借りて稼ぐ仕組みを再構築**したいと考えています。

新たな観光スポットとして期待される九十九島観光公園
＝令和3年12月、佐世保市野崎町

INTERVIEW

九十九島観光公園活用を

チーム俵　代表理事
尾崎　嘉弘さん

約50年前、野崎町に身体障害者療護施設「長崎県立コロニー」（後のつくも苑）が建設されることをきっかけに半島一帯でのまちづくりが始まりました。昭和46年には半島内の町内会が集まって俵ケ浦半島開発協議会を結成。行政への陳情・要望活動を行うようになり、平成13年に**展海峰ふれあい工房**をオープンしました。平成25年度からは外部の力を借りてトレイルコースづくりがスタートし、３年かけて半島４町のコースを作ることができました。

ふれあい工房のリニューアル後、当初は順調でしたが、コロナ禍で厳しい状況が続いています。若手たちの活動を見守る中、仲間づくりがまだ足りていないと感じることもあります。九十九島観光公園が観光の起爆剤となり、**ツッテホッテが半島の拠点**として再び人が集まる場所になってほしいと願っています。

まとめ

① 一般社団法人へと法人化
② 二つのプロジェクトに注力
③ 新たな収入源の確保
④ 地域おこしは継続性が大事。「できることから着実に」
⑤ 地域の人たちの力を借りて稼ぐ力の再構築
⑥「住民を巻き込む仕掛けづくり」が課題

取材を経て

市街化調整区域でもある俵ケ浦半島は、自然環境や営農環境を守るため、様々な制限があり、移住者の受け入れなど空き家対策ではハードルがありますが、それでも移住してくる人がいるのは、半島が持つポテンシャルの高さを物語っています。

取材を進めると、地域のマンパワー不足というフレーズを何度も耳にしました。**住民を巻き込む仕掛けづくり**は今後も課題となりますが、チーム俵が自走していく上では**半島外との連携も同じように大切**です。半島から車で２０分程度の距離に大学があることから、これまでの活動に加え、**学生たちの力を借りることができれば、交流人口の拡大や地域活性化**につながる可能性を感じました。